

Title	地藏信仰と太平記
Author(s)	釜田, 喜三郎
Citation	語文. 1954, 11, p. 9-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68444
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

地藏信仰と太平記

釜田喜三郎

既に拙論「流布本保元平治物語の成立を論じて太平記の成立総括に及ぶ」に於て、自分は流布本保元物語卷三、為朝が島に攻め寄せせる兵船を見ての懺悔の記事中・地藏菩薩信仰に關して、流布本太平記卷二十、結城入道地獄に墮つる事に拠ると説いた。勿論之は正しいと思ふが、地藏菩薩信仰は遠く遙かな伝統を引いてゐるやうだから、其に關聯して太平記の民族文芸としての一面を紹介し、大方學者の御垂示を得たい。

二

今昔物語卷十七、聊敬地藏菩薩得活人話、第廿四、は多田滿仲の家に野山に入つて鹿を狩り鳥を捕へ少しの善根をもせぬが、或時獲物を追ふ途中、地藏に頭を一寸下げた事があり、その為、死後地獄に行つた処、地藏菩薩に救はれ生き返つたことを述べ、其ヨリ此男忍道心ヲ発シテ永ク殺生断テ偏ニ地藏菩薩ヲ日夜ニ念ジ奉テ怠ル事無シ。此レヲ思フニ地藏菩薩アカラサマニ敬ヒノ心ヲ発セバ人ヲ不ニ弃給ザル事既ニ如此シ何ニ況ヤ心ヲ発シテ年来念ジ奉リ亦形像ヲ造リ尽タラム人ヲバ救ヒ助ケ給

ハム事可疑キニ非ズ、然レバ地藏菩薩ノ誓願他ニ勝レ給テ憑モシクナム思ユル此ヲ聞テソ地藏菩薩ニ可レ仕シトナム語リ伝ヘタルトヤ

と教訓してゐるが、印を附した所などは保元物語の粉本かと思はれるばかりである。此の話は、況齋叢書第九冊所収の岡本保孝の出典致には地藏菩薩靈驗記卷下に出てゐるといふが、同書は現在、上中二巻のみで参照することが出来ないし、第一、同書は福井氏の「実睿の地藏菩薩靈驗記の著作時期に就いて」龍大論叢昭和三年四月号に依れば室町時代のものである。とにかく相當古く伝つた話であらう。

之を受けた宇治拾遺物語卷三、多田新発意郎等の事に、

これも今はむかし、多田滿仲のもとに、猛くあしき郎等ありけり。物のいのちを殺すをもて業とす。野に出で山に入りて、鹿を狩り鳥を取りて、いさかの善根することなし。……よみがへりて後は、殺生をながくたちて、地藏菩薩にかうまつりけりとあり、太平記の粉本ではないかと疑はれる。平家物語卷十、維盛入水の条にある源頼義の描写も太平記の粉本となつたかも知れないが、平家物語には説話としての地藏信仰が見られない（卷二、小教訓に地藏菩薩の名が出るだけ）のである。続本朝往生伝にも

前伊予守源頼義朝臣者。出。累。葉。武。勇。之。家。一。生。以。殺。生。為。業。先。當。三。征。東。之。任。十。余。年。來。唯。事。闔。戰。切。入。首。斷。物。命。雖。楚。越。之。竹。不。可。計。其。預。不。次。之。勳。賞。叙。正。四。位。一。任。伊。予。守。其。後。建。堂。造。佛。深。悔。罪。障。多。年。念。仏。遂。以。出家。瞑。目。之。後。多。有。往。生。極。樂。之。夢。定。知。十。惡。五。逆。猶。被。許。迎。接。何。況。其。余。哉。見。此。一。函。大。可。懸。特。

とあり、之が平家物語の粉本になったことは既に云はれてゐることであるが、寧ろ語句の類似から見ると太平記の粉本とも考へられないこともない。かういふ風に殺生が悪い報を齎らし、懺悔改行により善い報の来ることは早く日本国現報善惡靈異記、自幼時、用、網、捕、魚、而、現、得、惡、報、緣。第十一、に見えてゐるのであり、単に地獄信仰に關してのみでなく、奈良朝以來一般に仏教布教の説話として語られる機會の極めて多かったものと思はれるのである。地獄行や地獄廻りの伝説は、其の他、日本靈異記、今昔物語に多く載せられ、其の後、室町時代までの有名なものを云つて見ても、地獄行の伝説としては小野篁や日藏上人の伝説があり、地獄廻りの伝説としては甲賀三郎伝説などがある。併しながら、今昔物語の例で見ると、地獄から再び生き返つた話は地蔵菩薩の信仰と關係してゐるのが、最も多いのであり、三國伝記巻五にも見られるが、それは私聚因縁集卷六、殺猴鹿ノ事では、唐土の話となり地蔵でなく弥陀如来が救ひ出した事になってゐる。

とにかく、地蔵信仰と地獄から生き返る話は、巷話伝説として各方面に利用され、附加せられ、それらが何れも實際の事として伝はる場合が多かつたと思はれる。

三

そこで、太平記巻二十、結城入道地獄に墜つる事が、何から粉本を得たかは明かには云へないが、大体、かういふ話の形式は既に一般に定まつてゐたらしいのであり、従つて、かゝる種類の伝説から附加されて来たものと見るべきで別に定まつた粉本があつたのでもないと思はれる。たゞ自分がこゝで考へてみたい事は、結城入道が臨終に當つての言葉との關係である。太平記には善知識の聖が後生善所の御望情ることなく、称名の声の中に三尊の来迎を御待ち下さいとて、遺言を求めたに對し、

此入道已に目を塞がんとしけるが、かっぱと跳ね起きて、か
ら／＼と打ち笑ひ、戦きたる声にていひけるは、我已に齡七旬
に及びて、榮花身にあまりぬれば、今生に於ては一事も思ひ残
す事候はず、只今度籠り上りて、遂に朝敵を亡し得ずして、空
しく黄泉のたびに赴き候ぬる事、多生広劫までの妄念となりぬ
と覺え候、されば愚にて候大藏権少輔にも、我後生を弔はんと
思はば、供仏施僧の作善をも致すべからず、更に称名誦經の追
實をもなすべからず、只朝敵の首を取りて、我墓の前に懸け鞭
べて見すべしと、いひおきける由伝へて給はり候へと、是を最
後の詞にて、刀を抜きて逆手に持ち齒噛みをしてぞ死にける
と記し、次いで

罪障深重の人多しといへども、終焉に是程の悪相を現するこ
とは、古今未聞かざる所なり。げにも此道忠が、平生の振舞を
きけば、十惡五逆重障過極の悪人なり。

を以て、地獄行きの話が始まるのである。此の宗広最期の言葉は、後藤丹治氏の名著「太平記の研究」には、平家物語入道逝去の条を粉本としたものと見てをとられる。之に就いては、大槻文彦博士が早く「結城上野介宗広入道道忠墳墓考」(史学雜誌第十一編)に於て

白河文書、七月十二日(興國二年)ノ無名ノ、状ニ「故上州
禅心被_レ致無二之貞節云々、其上兩度勸_レ老骨上浴、不_レ達本
意、於_レ勢州旅宿入滅、至_レ最後此御大事之外、無_レ被_レ懸_レ心事
云々、懇志之至、日夜寤寐、更_レ不忘却コト見ユ。太平記臨終ノ壯
語ハ姑ク措キ、此ノ文ニテ死ニ願スルマデ、大業恢復ニ憤慨セ
シ状ハ想像セラレ、人ヲシテ悲壯ノ念ニ勝ヘザラシム。

と論ぜられてをり、大西源一氏著「結城宗広卿勤王事蹟」にも同意見が見られる。此の太平記の記事は史実の伝聞であること明かだが、かういふ忠臣が、悪人と批評されてゐるのは太平記が結城宗広を誣ひたのではなく、仏教上から眺めた結果である。太平記卷十六、正成兄弟討死の事に、正季の

・七生まで同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ、と申したに對して、正成が

罪業深き惡念なれども我もかやうに思ふなり

と答へてゐるのでわかるが、武士が戦場で殺業をすることを仏教の方では罪業深しと考へてゐるのである。従つて、結城宗広が十惡五逆重障過極の悪人と批評されたのは、繞本朝往生伝に源頼義が十惡五逆と云はれてゐるのと同じであり、決して、太平記が結城宗広の忠臣たる事を誣ひたのではないのであり、自分は逆に、

ここに太平記の民族文芸としての成立の特質を見出さないうでられないのである。といふのは結城宗広の忠烈な最期の言葉の描写が、平清盛の最期の言葉と似たものであつても、一は朝敵を滅して日本中興の偉業を完成せんとするので、一は単に平家といふ一族の興隆に關するに過ぎないのである。而して、此の平清盛が地獄へ行つた夢を二位局が見たのに比すれば、結城入道の地獄行は遙かに、一般人民教化に都合がよいのであり、かういふ仏教布教に伴つて、烈々たる忠臣の最期の言葉が種多つけられてゆくことは西歐の民間伝唱詩人にも比すべき説教師の存在が暗々裡に考察せられるからである。

四

誰がかういふ地獄行の話を附加したものかは明かではないが、かういふ話が伝つて、一般人民の教化に如何に役立つかを考へてみるべきであり、之等が当時何れも事実として信ぜられたのであらうと思ふ。殊に

是併ら地蔵菩薩の善巧方便にして、彼有様を見せしめて、追善を致さしめんがためなり。結縁の多少に依りて、利生の厚薄はありとも、前仏後仏の導師、大慈大悲の薩埵に値遇し奉らば、真諦俗諦善願の望を達せん、今世後世能く引導の御誓、たのもしかるべき御事なり。

の語句は、前田家本、内閣文庫本、梁田本、流布本等は有するが、西源院本には全く缺き、野尻本、義輝本もただ、

サテ加様ノ悪人モ信スレバ悟ヲ開キ皈スレバ旨ヲ得ルコト、

調御ノ説ニタカハストテ皆心ヲ傾ケニケリ

とあるに過ぎず、地藏信仰に関して説かれることも漸次、定着して行つたらしいことから考へると、太平記の民族文芸としての特質がかういふ形でも示されてゐるのを知らねばならない。

之と共に、太平記卷二十四、三宅秋野謀叛の事附壬生地蔵の事に

武蔵国住人に、香勾新左衛門高遠といひける者只一人、地藏菩薩の命に替らせ給ひけるに依りて、死を遁れけるこそ不思議なれ

を以て始まる話は、児島高德に同心して宮方として大義に従つた新左衛門が、壬生地蔵堂に逃げ込んで、賊の探索から一命を助かつた話であり、地藏菩薩が身代りになり給うたのを知つた賊兵三人は、繩を以て高小手にいましめたのを後悔し発心修業の身となつたといふのであり、最後に

彼は順縁によりて今生に命を助り是は逆縁によりて来生の値遇を得ること誠に如来附属の金言相違せず。今世後世能く引導す。たのもしかり。悲願なり。

と地藏信仰を説教してゐるのを考へ合はずべきである。此の地藏菩薩が身代りに立つ原形は今昔物語卷十七、地藏菩薩變二小僧形一受箭語第三に出でゐるし、観音が身代りに立つ話なども今昔物語卷十六に見えるのであり、伝説として各方面に附加されてゆくとは思ふが、かういふ風に大義を絶叫する忠臣に関して説かれた点に、皇室を遺慮なく祖上に載せ痛罵することの多い太平記の社会批評が本質的に如何なものか察すべきであらう。

五

親長卿記延徳三年五月十六日条によれば、甘露寺親長も一条北鳥丸の観音堂に詣でて談義僧が太平記を読んだのを聞いてゐるし、後法興院記正文元年五月廿六日条によれば、関白近衛政家は成仏寺に參詣し、法華經の談義の後で禪僧が太平記を読んだのを聴聞してゐる。太平記が法華經に關聯して観音や地藏信仰を伴つた巷話伝説を採り入れてゐることは、足利氏の制圧下でありながら、一般人民に布教と共に尊皇心を植ゑつけた民間伝唱詩人の持ち廻つた口唱文芸の痕跡を留めると思はれるのであり、その点に於ても、民族文芸としての太平記の成立には平家物語の文芸的美意識に比して遙かに強烈な批評意識が見られるのである。

昭和十八年十二月二十九日稿

〔後記〕 本稿は「民族文芸の研究」と題して出版予定の十数篇の論考の一であつたが、敗戦に臨んで、一冊の書物の形となる機会を失ひ、今日に及んだ。地藏菩薩靈驗記については昭和十九年出版の予定であつた片寄正義氏著「今昔物語の研究」下第十一章があるが未刊に終つたのは残念である。

— 神戸商船大学教授 —